

強風に負けない飼料用とうもろこしの栽植本数

近年の気象は台風や温帯低気圧等の通過で、全道的に飼料用とうもろこしが大きな倒伏被害を受ける現状にあります。足寄町内でも 8 月 31 日に発生した突風により倒伏被害が発生しました。そこで倒伏により耐えられる栽植本数について検討しましょう。

1. 栽植本数試験結果より

栽植本数の考え方

① 収量性比較

令和 3 年度足寄町で実施した試験結果では、10a あたり栽植本数を畝幅 75cm×株間約 18cm (7,000 本区) と株間約 16cm (8,600 本区) に設定した場合の TDN 収量の差は 5 % 程度しかありませんでした(図 1)。

突風の被害発生現場 R6 年 8 月 31 日



② 倒伏しやすさ

また倒伏しやすいかを試す、引張強度試験 (HPR 値) においては 7,000 本区がより倒れにくい結果となりました(図 2)。

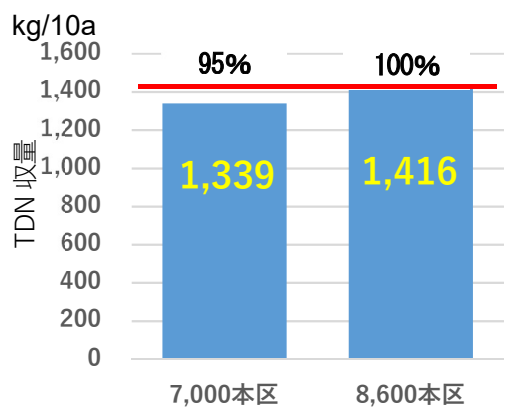


図1 栽植本数の違いによる TDN 収量の差

③ 着穂高について

栽植本数が多くなると着穂高が高くなる傾向があり倒伏しやすくなります(写真 1)。

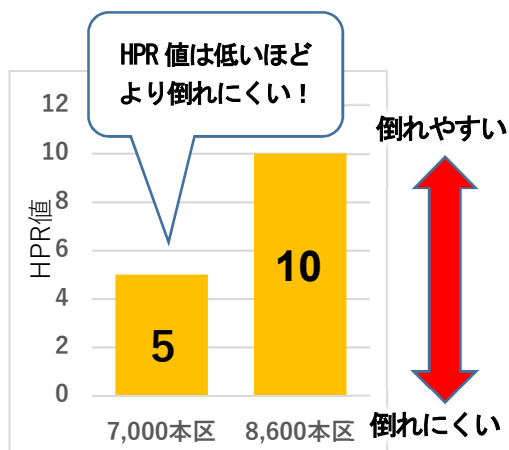
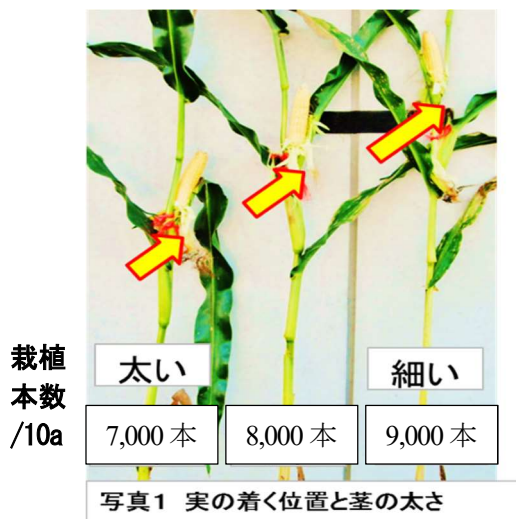


図2 引張強度(HPR 値)の比較

この結果から倒伏対策には、7,000 本区の栽植本数を確保することでより倒れにくい栽培が可能になります。

(令和 6 年 12 月 十勝農業改良普及センター十勝東北部支所作成)